

## SPring-8 ワークショップ「放射光によるタンパク質結晶解析の現状」報告

放射光構造生物学研究会

SPRUC の研究会として 2012 年 8 月 17 日に発足した放射光構造生物学研究会の共催として、SPring-8 ワークショップ「放射光によるタンパク質結晶解析の現状」を開催した。タンパク質結晶構造解析に関心のある研究者の参加を期待して、鳥取市にて開催された日本蛋白質科学会の第 13 回年会に合わせて、その最終日翌日の 6 月 15 日(土)に同年会の会場である「とりぎん文化会館」で実施した。参加者は事前登録者 48 名のうちの 46 名と当日登録の 7 名をあわせ 53 名となった。多くは BL 利用経験者だったが、1 割程度の未経験者が含まれていた。

本会の企画は研究会代表・副代表に SPRUC 利用委員会委員長の阪大教授・中川敦史氏を交えて進めたが、その趣旨は SPring-8 の構造生物学関連 BL の紹介により、シーズとニーズの結びつきを図ることである。会合は、まず SPring-8 でタンパク質結晶回折実験が可能なビームラインすべての報告から始まった。担当者が勢揃いして説明を行う機会はこれまでほとんどなく、全体を見通すことができ良かったとの参加者の意見があった。続いて BL 利用および運用と SPRUC の組織および活動について説明を行ったのち、総合討論を行った。予定していた約 30 分を大幅に超えて、1 時間にわたり活発な議論が続いた。

討論では、現在利用しているユーザーからの意見やコメントが多く挙げられた。以下に、重要な内容を列挙する。(1) BL 利用後に義務付けられる成果報告の具体的な手続きをどうするか。(2) 製薬企業ユーザーから成果専有利用のフレキシブルな運用を期待する意見。(3) より細かい時間単位で配分を可能にするグループ運用のあり方。結晶が解析に足る質を持っているか評価するスクリーニング課題の L1 分科会としての扱い方。(4) サポート体制の強化への要望。(1)については、成果報告の考え方や具体的な方法、複数の課題で得られた成果を 1 報の論文に記載して良いことなどを説明した。(2),(3)については、利用業務部と議論を行って実現可能性が高いことを確認したため、早期の導入に向けて準備を開始することとした。

最後に、本分野としての SPring-8 II への対応について確認し、京大で開かれる次回の SPring-8 シンポジウムで本研究会を開催して、議論を進めていくこととした。